



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

故ヨハネ・パウロ二世の 訪日の意味

三村 誠 一
長崎教区司祭

(1)

早いもので、故教皇ヨハネ・パウロ二世の訪日(来崎)から25年が経過いたします。当時、長崎で直接、あるいはテレビなどのマスメディアを通して同教皇の姿を見、その声を聞いた思い出を温めておられる方は、少なくないと思います。

ところで、あの教皇訪日は、わたしたちにとってどんな意味があり、わたしたちのその後の信仰生活に何を与えてくれたのでしょうか。たしかに、あれ以来、わたしたちの教皇についてのイメージは大きく変えられ、ぐっと身近なものになりました。「法

王的」権威者イメージから「慈父的」牧者イメージへの転換です。しかし、それがすべてではありません。わたしたちにとって、もつと必要かつ有益な「発想の転換」を呼びかける真剣な「姿」と「声」だったことを、見落としてはならないと思います。

故ヨハネ・パウロ二世は、教皇に選出されて(1978年10月)以来、日本訪問までの三年間で、すでに、中南米・ポーランド・米国・アフリカ諸国・フランス・ブラジル・ドイツなど16カ国を歴訪しておられました。あの訪日には、教皇訪問を強く望んでいる他の多くの諸国よりも日

本(の教会)を優先した理由があったはずだ。

キリスト教徒が国民のパーセントにも満たない、いわば仏教徒の多い国。しかし、当時、アジアで唯一の「先進国」に数えられるほどの科学技術と経済の大国。250年余の過酷な弾圧・殉教の歴史を生き抜いた教会。世界で唯一の被爆国・・・。

それらすべてを踏まえて日本訪問の意義を確認し、日本内での訪問地を選ばれたと思います。政治・経済・学問の中心⇨東京、被爆地⇨広島と長崎、さらに殉教の歴史に染められている長崎。

(2)

教皇の真の意図は、訪問された各地で発せられた教皇メッセージを改めて読み直せば、一目瞭然です。その主なものを拾い上げてみます。

- ・友情と尊敬のメッセージ
(東京カテドラルでの第一声)
- 「兄弟として、友として」
- ・聖職者の集い(東京カテドラルで、司祭修道士に) 「一致への執望」
- ・司教団へのメッセージ
- 「司教団の一致・福音宣教・召命の促進」
- ・キリスト教諸教会・諸教派の代表者へのメッセージ

・諸宗教代表者の集い
「尊敬する友人の皆さん」

・教皇ミサの説教
「キリストを通じて見出す平和」

・若者の集い
① 「人生の目的と未来」

② 「あなたが架けるべき橋」

・在日外交団の集い
「共通善の推進と維持へ連帯を」
(以上 東京滞在中)

・平和アピール
「戦争は人間の仕業です・・・」

・報道陣との出会い
「共通善への奉仕」

・記念講演
「技術、社会、そして平和」
(以上 広島滞在中)

・司祭叙階式・新司祭に贈る言葉
「油塗られたものとして、世の光として」

・修道女へのメッセージ
「全き奉獻への励ましとヒント」

・殉教者記念のミサ
説教 「二重の旋の実践者に学ぶ」

・二十六聖人を偲ぶ至福の丘
「死より強い愛を証して」

・コルベ神父ゆかりの地で
「文書宣教―福音の使命を堅持せよ」

・原爆被爆者へのメッセージ

「平和推進力として被爆者の生の尊さ」

・離日メッセージ

(以上 長崎滞在中)

(3)

教皇は、ご自身の言葉を借りれば、「平和の巡礼者」として訪日されました。そして、「平和」、しかも「キリスト的」平和に焦点を合わせておられたのです。別言すれば、わたしたち日本のキリスト者の目を「宣教Ⅱ愛のあかし」へと真正面から向けさせるよう、命をかけて促すために来日されたのです。

第二バチカン公会議やその後の何回かの世界代表司教会議(シノドス)を経ながらも、その精神や呼びかけに鈍感な日本の教会をしっかりと目覚めさせる警鐘を打ち鳴らした、とも言えそうです。

あれから、25年が経過いたしました。ヨハネ・パウロ二世が、あの雪の中で、殉教地で、テレビカメラの前で、いのちをかけて訴えられた真の「平和と宣教」への道に、今、わたしたちはどれだけ踏み込んで行っているのでしょうか。自己への「引きこもり症候群」からまだ抜け出せずに、相変わらず足踏みしているのでしょうか……。

Q&A

「故ヨハネ・パウロ二世」

来日25周年



写真:DEITZ(株)

Q・故ヨハネ・パウロ二世が日本を訪問されて今年で25年になりますが、教区では何か特別な記念行事を計画しているのですか。

A・前教皇ヨハネ・パウロ二世は昨年4月2日に亡くなれましたが、その面影は数々のメッセージとともに、いまだわたしたちの脳裏に鮮明です。歴代教皇の中で初めて日本を訪れてくださったお方だということで、特に印象深いものがあるからだと思います。

とりわけ長崎では、あの「雪の殉教ミサ」の強烈な記憶が残っています。ミサが終わってから特設の祭壇のあるステージに再び姿を現されて、凍てつく中で2時間余りにわたってミサに参列した人々の労をねぎらい、「さすが殉教者の子孫です」という意味の言葉をかけられました。

前日の広島「平和アピール」でくり返

されたように、過去の殉教の歴史を振り返り、現在と未来の信仰に責任を持つ信徒の姿を現実に目の当たりにした実感を述べられたのだと思います。

さて、具体的な記念行事ですが、まず25年前の過去を想い出すことから始めようと、1月24日から2月26日までの予定で、いま松ヶ枝のピースミュージアムで「平和の巡礼者」写真展が開かれています。

Q・その写真展は、どのような趣旨で開かれているのですか。

A・ご存知のように高見大司教様は、今年、宣教特別年間として「ザビエル年」を設定しておられます。それは今年がザビエル生誕五〇〇年にあたるからです。

これは、過去を振り返ることは未来に対

して責任を持つことだ、と繰り返し述べられた前教皇のことばにも呼応するものです。というのは、日本の教会の歴史はザビエルに始まるわけですし、当時はまだ未来であった二十一世紀という節目に入る前の1981年、いわば第二のザビエルとして、同教皇が訪日されたからです。

ですから、この写真展の意図するところは、まず過去の殉教の歴史を振り返り、二十一世紀という未来に責任を持つとされた故教皇の姿を再現し、その熱意と信仰に触れよう、というところにあります。

もう一点重要なことは、この写真展はピースミュージアムが主催者であるということです。教会外ということばはあまり響きのよいものではありませんが、一般の施設が企画・実行し、広島教区と長崎教区が全面協力するという形で実現したものです。故教皇が単に教会内の方ではなく、世界の精神的リーダーであったことを示す行事だとも言えるでしょう。

Q・広島「平和アピール」というと、あの「戦争は人間の仕業です」という出だしのことばがよく知られています。その後の日本の平和運動にも影響を与えたのでしょうか。

A・いまはこの「平和アピール」の代名詞のように使われている「戦争は人間の仕業です」

ということばだけでも、日本社会をはじめ長崎のカトリック信者たちにかんがりの影響を与えた、と言われています。とくに「戦争は神のせつり」ということばの誤解から、ただ耐え忍ぶだけで積極的な平和運動には立ち上がれないでいた長崎の信徒が、このことばによって目を覚まされたという事実もあるようです。

いま、日本の平和憲法が変えられようとしています。あるべき国の土台として平和を据えるべき論拠と根拠は、この「平和アピール」に示されているのではないのでしょうか。平和は、過去の生々しい戦争による破壊の現実から、論理を超えて求められるものであるはずだからです。

歴史上幾度も戦争が起りましたが、そのほとんどが自衛のためと主張されたものでした。相手が攻めてきたらどうするのだという論理は、自衛のための戦争に備えるという主張に論拠を与えるように聞こえますが、戦争の現実はその論拠さえ破壊してしまうものなのです。

まさに「平和アピール」のはじめに前教皇が述べておられるように、戦争は「人間のしわざ、人間の生命の破壊、死」です。

Q・教皇訪日が日本の教会に与えたものは、何だったのでしょうか。

A・よく耳にするのが、この時はじめて日本の教会は市民権を得た、ということばです。これは、やっとカトリック教会が社会的に認められるようになった、という意味だと思います。

日本の教会の内部への影響も少なからぬものがあつたと思います。しかし、第一面で三村師が述べられておられるように、あの時の教皇の日本の教会向けのメッセージを再読し、その内容が現実の教会の姿に反映されているかどうかを検証してはじめて、その影響度を計ることができるとは思いません。

とくに、東京での聖職者の集いにおける「一致への熱望」、若者の集いにおける「人生の目的と未来」、「あなたが架けるべき橋」、長崎での修道女たちへの「全き奉獻への励ましとヒント」、そして、全日程とご自身の全人格とをもって示された福音を世に示すことへの飽くなき情熱などが、この記念のときに過去を振り返りつつ現在・未来に生かすための、わたしたちへの贈りものだったのでないでしょうか。

最後に広島平和記念資料館でサインを求められて、しばらく考えられたのち、同教皇が記された次のエレミア書のことばを味わってみたいものです。

「主は言われる。わたしの思いは平和であつて、災いではない。」

(エレミア29・11)



「参加する教会」をめざして (4)

協働責任を担う

はじめに

これまで、「参加する教会」とは、どういうものなのかを三つの側面から考えてきましたが、今回は、「協働責任を担う」という側面から考えてみたいと思います。つまり、小教区の信徒たちがキリスト者としての使命や役割を果たすとはどういうことなのかを、改めて確認してみたいと思います。

1. ある小教区の外から

自分の小教区の状況について次のように語る、幸せそうな笑顔をしながら主任司祭と出会いました。
「私の小教区の信徒たちは、生き生きとしています。教会の仕事を手伝ってくれる人を探すために、私は

苦労したことなど一度もありません。必要なときにひと声かければ、誰かが手伝いを申し出てくれます。それに、私が作り上げた小教区組織内には、数多くの評議員や、地区委員、活動団体のメンバーなどがおり、それぞれの分野で活発に活動しています。」

しかし、この小教区の信徒たちは、現在の状況を本当に快く思っているのでしょうか。何かが足りないように感じている人が多いかもしれません。

この小教区の信徒たちは、どんなにすばらしい活動をしているときでも、自分たちは主任司祭のお手伝いをしていないのだという意識からぬけ出せないのではないのでしょうか。極端な場合は、主任司祭に「使

われている」と感じているかも知れません。



この小教区では、主任司祭が司牧や宣教のすべてのことについて計画して、その責任も取り、信徒はその手足となって動いている、ということになります。司祭から声をかけられた人は、司祭の頼みだからということでも仕方なく引き受けることもあるでしょうし、声をかけられない人は、手伝いたくても手伝えないでいるのかもしれない。これでは、教会とはキリストの使命や役割を司祭と信徒が共に担うために召されている場だ、ということを実感できるのは難しいでしょう。

このような小教区は、「参加する教会」であるとは言いがたいのです。たとえ多くの信徒が積極的にさまざまな活動をしていたとしても、彼ら

2. 理想的な家族とは

は主任司祭の「お手伝い」をさせてもらっているにすぎないのです。

近年、日本でも離婚する夫婦の割合が非常に高くなってきました。それは、恋愛結婚の割合の増加に正比例しているようにさえ思えてきます。しかも、離婚の理由の多くが「性格上の不一致」であるといわれているのですから、自己中心的な日本人が多くなつたせいだ、ということになるかも知れません。そのような理由で離婚に踏み切り、夫婦双方が互いに傷つけられ合うことはしかたがないにしても、それでは子どもたちがあまりにもかわいそうです。

離婚などとは無縁と思えるような家族に家庭円満の秘訣を伺ってみると、全員が口をそろえて、「家の中でみんなが幸せに生活しているようにするために、自分は自分にできることをするように心がけている」という返事をしてくれることでしょう。「良い家庭」といわれるところでは、家族全員がお互いのことを気づかい合い、一人ひとりの喜びや悲しみを、全員が自分自身のこととして、共に喜び、共に悲しみます。

ある母親が病気をしました。そのとき長女は、「弟の面倒をみるのは、私の仕事じゃないわ。それはお母さんの仕事でしょう」とは決して言わないでしょうし、その弟も、茶碗を片づけるなどの、自分でできる手伝いを進んですることでしょう。家族全員が母親が元気になるようにいろいろと気づかい、お互いに助け合うことでしょう。

3. 初代教会の信者たち

新約聖書の使徒言行録や使徒たちの手紙の中には、初代教会の信者たちのさまざまな姿がくわしく記されています。そこで、その中のいくつかの場面をテキストの順に挙げてみることにいたします。

使徒たちは、裏切者となったユダの後任としてマチアを選び、イエスが望まれた「12」という数字を大切にして、互いに協力し合う決意をしました(使言1・12〜26)。信者たちは、すべての物を共有にし、自分の財産や持ち物を持って、それぞれの必要に応じて分け合っていました(使言2・44〜45)。日々の分配が公平に行えるように、信者たちは、その任にふさわ

しい人物を助祭候補者として自分達の中から選び出しました(使言6・1〜6)。

迫害が起こって地方へ散っていった信徒たちも、行く先々でキリストの福音を積極的に関へ伝えました(使言8・1〜4)。

ペトロが投獄されたときには、信者全員で彼のために熱心な祈りを捧げました(使徒12・5)。

聖パウロは、教会全体を生きたキリストの肢体にたとえ、一人ひとりの信者には固有の使命があり、その全員が一つの体を形成してキリストの使命を継承していくのだ、と教えています(一コリント12・12〜31)。

これらの箇所からも見えてくるように、初代教会では、教会共同体のすべてのメンバーがキリストから与えられたそれぞれの任務を自覚し、それらを積極的に実践しようとして努めていたのです。このことを、いま私たちは、「協働責任を担う」ということばで表しているわけです。

4. 私たちの「協働責任」とは

これまでの長崎教区では、「福音を宣教する長崎教区」をめざし

た取り組みが展開されてきました。そして高見大司教様は、今年の年頭教書で、この一年(昨年12月3日〜本年12月3日)を「宣教年間『2006・ザビエル年』」とし、

ザビエルから始まった日本とくに長崎の教会の歴史を振り返り、教区の現況をふまえて、これからの宣教のあり方を考えていこう、と呼びかけられました。そして、具体的に次の3つのポイントを挙げておられます。

① 宣教と殉教の歴史に学ぶ

ザビエルの宣教精神に習うために平戸で計画がなされているいくつかの行事や、「長崎さるく博」の中の「学さるく」の一環として大浦天主堂で企画されている、キリシタン史の講演会やミニ・コンサートなどに、誘い合って参加する。現在進められている日本の18殉教者列福の早期実現のために祈る。

② 教区の現況と向き合う

信者数の減少、ミサ参加者数の減少、そして受洗者が極端に減少しているなどの現実と向き合い、その解決を皆で真剣に考える。

現在進められている小教区・地区・教区組織の見直しにかかわる課題に、教区内の信者全員で真剣に取り組む。

③ 福音化され、福音化する

教会の外へ向かった宣教をするためには、まず自身自身が福音の教えによって生かされる、つまり「福音化される」必要がある。そのために最も大切なのが、より積極的な聖体祭儀への参加である。

「みことばの分かち合い」を中心にすえた小共同体づくりに力を注ぎ、自己の福音化、社会の福音化につなげていける恵みを祈り求める。

「信徒発見」150周年に当たる2015年までの10年間を、「新たな信徒発見」の期間、すなわち福音化された信者へ生まれ変わるための期間ととらえ、みんなで手を取り合いながら努力していく。

すべての信者、すなわち司教、司祭、信徒、修道者が「協働責任」を担い合うことによって、教区全体が「参加する教会」に成長していけるのです。



〈シリーズ〉共に生きる信仰

パストラルケア

命に寄り添うケア(6)



もり かつし
盛 克志

レデンプトール会司祭
(臨床パストラル・カウンセラー)

祈りとは、生きること

「祈ること」は、パストラルケアに欠かすことのできない要素の一つである。祈りはよく「呼吸」にたとえられることが多いが、呼吸とは異なる点もある。それは、呼吸は意識せずに自然に行っているものだが、祈りはそうではない。

祈りは自分の心から出るものである。人間は生まれたときから、自分の限界を超えた時に祈りをする。祈りを、自然に身につけている。祈りなくして私たちはスピリチュアル(精神的)な世界へと入っていくことができず、物事の本質をつかむことができない。祈りとは、自分の願いを求めただけでなく、

神のご計画に自分を合わせていくことである。

委ねること

そしてまた、祈りとは「委ねる」ことであり、諦めとは本質的に違うものである。「委ねる」とは、神が全てを最善に取り計らってくださるということに心から信頼を寄せることであり、自分の望み以上に神に期待して歩むことである。大切なことは、「神と結ばれている」という一言につきる。祈りなしには、神と結ばれることはできないし、神との一致を保つこともできない。次のみ言葉は、イエスが私たちに与えてくださった恵みの言葉である。

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れはなりません。」

(ヨハネ 14・27)

イエスは、この世が与える一時的な「やすらぎ」ではなく、いつ

までも続く「平安」を残してください。この「平安」こそ、パストラルケアが最終的に求めるものである。聖アウグスチヌスは自らの人生の歩みを記した『告白』という本の中で、「あなたは私たちを、ご自身に向けてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです」と、自分の人生を告白している。この聖人の言葉を思い起こしながら、ケアのあり方を深めていくのはどうだろうか。

共に生きていくイエス

人間のいろいろな悩みには、いつの時代でも変わらないものもあるが、その時代の文化や社会構造を背景として新しく生じてくるものも数多くある。そうすると、その時代のニーズに応じた対応が求められることになる。

しかし、どんな状況にあっても、私たちにあって最も大きな慰めは、私たちの罪の赦しのために十字架にかかられたイエス・キリストが、よみがえり、今も私たちと「共におられる」ということである。これはイエスが昇天の前にガラヤにおいて、

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28・20)と約束されたことによる。

この約束を信じて、生きることによって希望を持つことが大切である。「希望」

こそ、パストラルケアの中心的役割を持つものである。全ての「終わり」の中にはすでに「始まり」が含まれており、新たな「いのち」の息吹が芽生えているのである。だから、「待つ」ことにも大きな意味がある。「待つ」とは、何もしないで待つのではなく、期待してすでに何かが始まっていることを信じて待つことである。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」(ローマ 8・28)

このみ言葉に支えられて、いかなる時にも「共にいる」と約束してくださった、主なる神に信頼して歩むことの大切さを忘れてはならない。

小さな心づくし

「はっきり言うておく。わたし

の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」(マタイ 25・40)

たとえどんなに小さな行為でも、心を込めてするならば、人の魂を慰めることができる。これこそ、ケアの本質であろう。

マザー・テレサは、「たいせつなのはどれだけたくさんのかをされたかではなく、どれだけ心をこめたかです」と述べた。愛のわざはどんなに小さくても、その行為は「イエスにした」ものであるというのである。それは心づくしを受けた人の喜びであるとともに、イエスの喜びでもある、ということとを心に留めておこう。

パストラルケアにおけるきめ細やかな配慮とは、「あなたがあなたである」という、その人の存在の重みに焦点を合わせることであり、その人らしさを保ちながら、共に寄り添っていくのである。

自己へのケア

ケアすることの特性である、信頼、正直、忍耐、謙遜などは、そのまま自分自身をケアすることにも当

てはめる必要がある。自己の成熟への過程なくしては本物のケアは育ってはいかない。

自分自身をケアするためには、自分自身を他者として感じ取る訓練をしなければならぬ。そのためには、自己の成長のために常に自分のあり方を指導してくれる、スーパードクター・ヴァイザー(専門的カウンセラー)などの指導を仰がなければ、自己中心的なケアになりがちである。

日本的パストラルケアの必要性

私たち日本人には、日本的パストラルケアが求められている。それは、日本の自然、文化、習慣、人間関係、価値観などを十分に考慮した、日本人の魂を支えるためのパストラルケアである。

そのため、私たちは日々の生活に心を砕くだけではなく、身の回りにも目を配る必要があるのではないだろうか。一本の木に目を留めてみるだけでも、春は芽吹いて花を咲かせ、暑い夏は葉が茂り陰をつくって人々を涼ませ、秋には紅葉して葉が落ち、寒い冬には・・・自然界は、そのような四季折々の風情を見せてくれる。

そんな細やかな心配りができる、日本的な本物のケアが求められるのではなからうか。

今、時代はいろいろな意味で変化しつつある。たとえ周囲が目まぐるしく移り変わっても、人間が人間である以上、「生きる意味」「生きる目的」を問うことはこれから変わらないであろう。そのため、「希望」に裏づけられたケアのあり方がますます求められてくることだろう。

次の祈りによって、このシリーズ「パストラルケアへ命に寄り添うケア」の結びとしたい。

神よ、

変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。

それは、それを受けられるだけの冷静さを与えたまえ。

そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ。



典 礼

豆 知 識



＊お通夜や葬儀のとき、故人に聖水を用いるのはなぜですか。

聖水は洗礼に用いる水であり、洗礼を記念する水です。そのため、聖水を用いることで、故人が洗礼を受けた者であるということを感じているのです。わたしたちが復活徹夜祭や聖堂への出入りの際に聖水を用いるのと同じです。洗礼はキリストの死と復活に秘率的に与ることですから、故人がキリストの復活にも結ばれていることを記念しているのです。

＊それでは香を使うのはなぜですか。

香は敬意の表現です。洗礼を受けた人の体は聖霊の神殿ですから、遺体に対しても敬意を表するのです。葬儀の儀式書によれば、献花にも同じ意味があります。

＊葬儀ミサで「平和のあいさつ」がないのはなぜですか。

「平和のあいさつ」とは「主の平和がいつ

もみなさんとともに。」「また司祭とともに。」という受け答えのことをいいます。自分から相手に向けてのあいさつとは異なり、キリストの与える平和を受けるものです。ですから葬儀ミサにも「平和のあいさつ」はあります。

ところで、「たがいに平和のあいさつを交わしましょう。」という招きのことば（そのために分かりにくい印象を受けますが）に続いてお互いに交わす一礼は「平和と愛のしるし」と呼ばれ、ミサの総則には「適当であれば」行うようにと記されています。日本では、葬儀ミサに非キリスト者の参列も多いことなどに配慮して割愛されているものと思われま

＊小教区で典礼委員をまかされたのですが、どのように務めたらいいのかわかりません。

一つ一つ典礼行為の現場は異なりますので、マニュアルのようなものはありませんが、一般に典礼を理解するためのものともよいテキストは儀式書です。キリスト教書店で購入することもできますし、聖堂に備えてあるものを借り受けて、これに目を通すこともできるでしょう。ただし、特殊なことばや式文の選択など、難しい部分もありますので、典礼行為を準備する際に、司式司祭や先輩の委員の方と一緒に確認なさるのが分かりやすいと思います。

典礼や典礼奉仕の内容を紹介した手に入り

やすい本には、オリエンズ宗教研究所編『典礼奉仕への招き』や石井祥裕著『神とともにある生活ーキリスト教典礼の内的風景ー』などがあります。参考にさせていただきます。

＊ミサの準備をするとき、司祭用のミサ典礼書はどこを開けばよいのかわかりません。

香部屋に『教会暦と聖書朗読』という冊子があると思いますが、当日の典礼を確認すると、ミサ典礼書の「公式祈願」（集会祈願・奉納祈願・拝領祈願）と「叙唱」のページが指示されています。ここにしおりを入れておきます。それ以外に「奉献文」と「交わりの儀」の部分にもしおりを入れますが、いつも用いている典礼書であれば、すでにあることでしよう。以上四方所のしおりを確認して、最後に「ミサ式次第」の「開祭」の部分を開いておきます。ただし、司式司祭によつては暗記しているのが必要なこともあります。この場合は「集会祈願」のページを開いておきます。

（嘉松 宏樹）



Catholic Archdiocese
NAGASAKI



ある親子連れ

最近の子どもたちは自制心、克己心に乏しく、我慢強さが足りない、と言われる。経済大国日本に生まれ、個人的には多少の違いはあるにせよ、食べたい物を食べ、好きな洋服を買ってもらい、自分の部屋まで与えられたりして、何不自由なく、悠々と暮らしているのが現状である。

各家庭においては、子どもから物をねだられれば、そこには何らかの言い聞かせはあるにせよ、子どもが欲しいのなら仕方がないと、かなりの無理をしても買い与えてしまうのが、大方の傾向ではないかと思う。多くの場合、最終的には子どもの要求が受け入れられ、まかり通っているのが実情であろう。

恵まれ過ぎて、ぬくぬくとしている子どもたちの姿を見ていると、「欲しがりません、勝つまでは・・・」を合言葉に、窮乏生活に耐えていた戦前生まれの私にとっては、まったくの別世界のような気がする。

果たして子どもたちを、このような温床育ちの状態においてよいのであろうか。あまりにも与え過ぎ、甘やかし過ぎではないか、と心配せずにはいられない昨今である。

物は豊かになったがその反面、人々の心は貧しくなったと言われるとおり、すでにそのひずみは随所に現れている。暴行、いじめ、傷害、自殺、非行、横暴なども、すべて我慢のきかない自分本位の考えに起因しているのだと思う。

近年、学校や家庭、地域社会において、耐える心の育成が強調されているが、これもひずみを是正するための深刻な提言であろうと考える。

「耐える心の育成」について考えるとき、私はすぐにある親子の姿を思い出す。

ある日の午後、中央橋横の鉄橋からアーケードに入り、少し行った所にあるおもちゃ屋の前で、4、5歳くらいの男の子が大声で泣いているのを見かけた。店先に並べてある熊の縫いぐるみが欲しい、とだだをこねていた。

まだ30歳を少し過ぎたかと思える若い母親は、少々てこずり気味であった。「家には積み木もあるし、犬の縫いぐるみだってあるでしょう。我慢しなさい。」と母親・・・。「いやだ、いやだ。熊がいい・・・。」と男の子・・・。

私は、この結末を見届けることにした。しばらく親子の問答が続く中に、女店員が顔を出し、「坊や、どれがよかと？ この熊ちゃん可愛いもんね・・・。」と声をかけた。味方を得たとばかりに、子どもはますます大声で泣き叫び、道路に寝転がって手足をばたばたと動かし始めた。私は思わず店員の方を振り向き、首を横に振った。この親子は何も気がつかなかったが、店員は私を連れの者だと思ったらしく、すぐ奥の方へ引っ込んだ。

この親子のやり取りに、何かと通りがかりの人たちが集まって、何やら囁いている。母親は周囲を見て、ややばつが悪そうな素振りをした。これで勝負は決まった、かに思われた。

それでも、若い母親は引き下がらなかった。「これだけ言っても分からないのなら、お母さんは知りません。行きますよ・・・。」と言って歩き出した。男の子はまだ泣き続けていたが、その目は母親の後ろ姿を確かめていた。母親は、一度も振り返ろうとはしなかった。

母親の姿が見えなくなった途端、男の子は泣くのをやめてさっと起き上がり、一目散に母親の後ろを追って走り去った。

勝負は一瞬のうちに逆転し、若い母親に軍配が上がったのである。私は、この若い母親からすばらしい教訓をいただいたことを感謝した。

30分ほどで用事を済ませての帰り道、仲良く手をつなぎ、楽しそうに歩いている先ほどの親子連れを見かけた。私は、胸がジーンと熱くなるのを感じた。そしてあの子は、すばらしい母親のもとで、きっと我慢強い、たくましい子に育っていくに違いないと確信しながら、ほのほのとした気持ちで、二人の後ろ姿をずっと見送っていた。

(村岡 正則・むらおか まさのり)

ミサを豊かに生きる

—平戸地区の生涯養成講座—



長崎教区では、教区主催の各種養成講座のほかにも、地区主催の信徒のための生涯養成講座が長年続けられている。
平戸地区の今年度の講座は「ミサ」に焦点をあてたテーマで行われているようなので、担当司祭の一人にその内容などを伺ってみました。

☆「ミサ」をテーマにしようと考えられたのは、どのようなきっかけからですか。

どの地区でも同じ経緯をたどっているようですが、平戸地区でも、最初の数年間は「聖書講座」が行われていました。しかし、長年行っているうちに、聖書だけではなく、要理の勉強もさせてほしいという声がかかるようになり、聖書と要理の時間を半々にしたり1年ごとに変えてみたりという、試行錯誤が繰り返されてきました。

そして今年、教会全体として典礼への参加姿勢に活気がないし、ミサにやって来る信徒たちからも「与る」という姿勢しか感じ取れないので、ミサは「司祭と信徒が共に捧げている」のだという意識を持たせるために、年間テーマを「ミサ」にしようということになりました。

私たち信者の生活は、聖体によって養われ、聖体とともにこの世に派遣され、そしてまた聖体に戻るといふ、ミサを中心としたものであるはずで、そこで、ミサが持つすばらしい力を日常生活に活かせるためにもこのような機会が必要だと感じましたから、とも言えるかもしれません。

☆その内容や、やり方について教えてください。

年間テーマは「ミサを豊かに生きよう」で、これを8回にわたって深めることにしています。

そしてその内容は、以下のようになっています。

- ① 典礼と典礼暦
- ② ミサと教会
- ③ 典礼的な信徒の奉仕職
- ④ ミサ中の聖歌
- ⑤ ミサ中の聖書朗読
- ⑥ 共同祈願の作り方
- ⑦ ミサと生活
- ⑧ まとめ・質問コーナー

一つひとつの講座では、知識として学ぶより、その心構え（心）を大切にしようと考えています。しかし、内容によっては実践も含まれます。

例えば、⑤の「ミサ中の聖書朗読」においては、

「み言葉は読むものではなく、伝えるもの」であることを強調し、実際に皆の前で読む練習もしました。時間が2時間と限られていますので、発声の仕方や、その練習までではできませんでしたが、基本的なことを押さえておくことで、あとは、各自で練習してほしいと願っています。

やり方は、その日の内容によって、正担当者として副担当者、そして協力者も加えて3人の司祭が協力して行うこともあります。チームを組めば、一人ではできないことでもそれぞれが持っているものを出し合うことができたので、このようなやり方をして本当に良かったと思っています。

☆今年の講座を通して

気づかれたことはありませんか。

この講座への参加者は、司祭、修道者、信徒を合わせて、平均40から50名で、参加している信徒は、このような機会を逃すまいと、とても熱心に聴講しています。雪が降ったり氷が張ったりしている日でも集まって来られるので、こちらが驚いているほどです。

今回のテーマは、信者にとって大切な内容であるうえに、信徒の学びたいという熱意も感じられるので、他の地区でも、何らかの形で「ミサ」についての理解を深める研修会のようなものを開かれたらいいのではないかと感じています。

また、典礼委員会が現在取り組んでおられる研修会などを発展させ、さらに充実したものにしてほしいとも願っています。

財務委員会

聖堂などを

建設するとき……



プチジャン神父と浦上のキリシタンたちとの劇的な出会いがなされた、いわゆる「信徒発見」後の長崎教区では、つぎつぎと名乗り出た信徒たちが中心となって、さまざまなおりに教会堂や仮聖堂などが造られていきました。そして大浦に在住する司祭たちは、万難を排してこれらの場所を巡回し、ごミサを捧げることができるようになりました。日本中のキリシタンたちが親から子へと永年語り伝えてきた悲願が、やっとかなえられていったのです。

ところで、これらの教会堂や仮聖堂などは、すべて信者たちが自分たちの手で造り上げていったものです。三度の食事を二度ないし一度に減らしてでも造り上げたいという願いに支えられながら、数多くの聖堂が造られていったのです。

現在の私たちは、あの「信徒発見」の日から一世紀以上も後の時代に生きています。そして

長崎教区内には、小教区の本聖堂と巡回教会の聖堂とを合わせると、130以上の聖堂が存在しています。多少の例外はありますが、そのほとんどがその教会に在籍する信者さんたちが心血を注いで捻出した経費を基にして造られたものです。

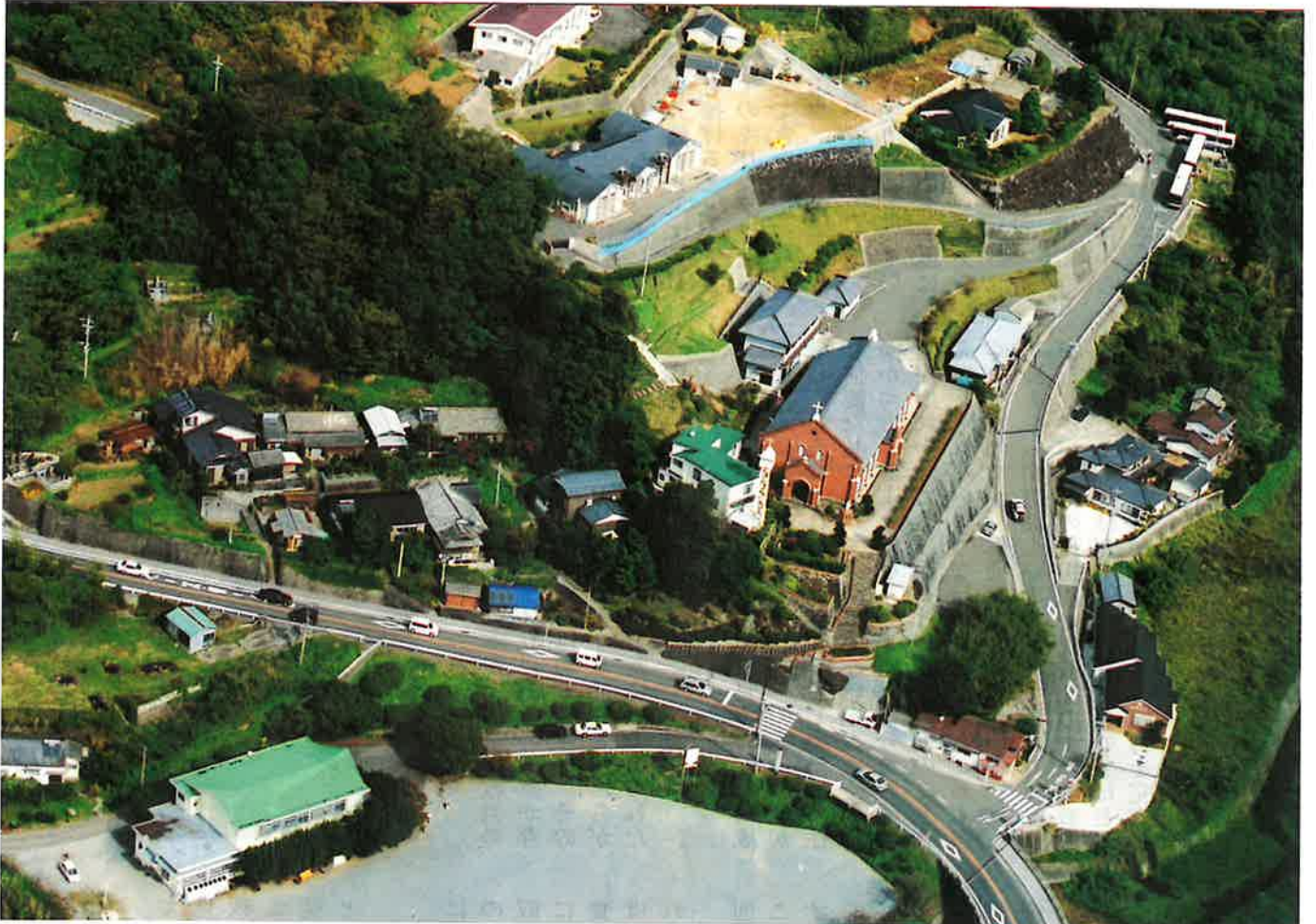
ところが、戦後しばらくして日本の経済的成長が盛んになり、田舎から都会への人口流出が激しくなるにつれて、過疎化が激しい地域に住む信徒たちにとっては経済的な負担も重くのしかかってくるようになりました。自分たちの聖堂が崩れかけても、改築どころか修理のこともさへ考えられないような状況に陥ったところも多くなったのです。信徒数が多い教会の場合は、不満をもらす信徒もいないわけではありませんでしたが、各自の負担額が信徒数の少ない教会と比べるとそれほどなくなるので、ほとんどのところが何とか計画どおりの建物を完成さ

せることができました。そのような問題がだれの目にも明らかになってくるにつれ、「聖堂建設費のプール制」なる意見が各地で盛んに聞かれるようになりました。教区レベルの各種の会議でもそれが話題に上ることはありはしましたが、教区民全員の抜本的発想の転換がなされない限り実現は無理だろうとして、問題は先送りにされてきました。

故島本大司教様は、この問題を解決するためには、これまでなされてきた教区の「経常収入」の不足分を大浦天主堂の観光収入などの「財務収入」で補てんする形をやめて、教区費の改定により「経常収入」の健全化を計り、聖堂建設費の援助などのために必要となる経費については「財務収入」で賄う、という方針を打ち出されました。

5年ほど前に誕生した当財務委員会では、前回（2004年4月号で）ご報告しましたように、この問題を最優先課題とし、聖堂などを増改築する際の小教区と教区の関わりについての検討を行ってきました。そして、小教区内の建物を増改築する際に大司教様と当委員会へ提出するための3つの書類（境内建物建設許可及び補助申請検討依頼書」「境内建物建設許可及び補助申請書」「関係書類作成要項」）を作成し、各小教区へ届けることができました。そして昨年4月からは、境内建物の増改築をする際にはこれらの書類を用いて申請・認可などがなされていますので、皆さまにもご報告いたします。

生活教会 の中の



黒崎教会

フォトプラン 山本 富夫

赤煉瓦

角力灘を左手に黒崎川沿いに曲がると、湯の花橋を過ぎた高台に赤煉瓦造りの教会堂が姿を現す。

最初の教会堂は下黒崎の「湯穴」にあり、大浦天主堂から巡回していたという。

その後、外海小教区に入り、一八八七年、黒崎小教区として独立した。

現教会堂建設の道のりは険しく、一八八九年に着工し、完成を見たのは一九二〇年であった。

爾来、歳月を重ねること七〇年。風雨のため痛み、「平成」になり大改修に踏み切った。

今、教会堂は以前にもまして凛とし、信仰の力とその偉功を証している。